

環境について  
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？



# Save The Kikuchi River

## 工

工でエビを釣るとい  
話を前々回の広報誌  
で致しました。今度は

釣られる方のエビ(ダグマ)につ  
いて書いてみます。エビ釣りといえ  
ば懐かしく思い出されることですが  
山あります。終戦前のことですが  
私たちが子どもの頃、麦の穂が黄  
色くなり始めると「もうそろそろ工  
ビの掛かるばい」と誰かが言い出せ  
ば「そんなら今度の日曜日に釣りに  
行くぞ」話しが決まるのは早い。そ  
れから10本ほどのサンチクの細い  
竹を切ってきて釣竿を作ります。  
1間足らずの短い竿にテグスとエ  
ビ釣り針と錘を付けて(テグスが手  
に入らない時は木綿糸に錘は小石)  
ミミズを何匹かタカッポに入れて、  
竿を3本程かついで菊池川へ出か  
けたものです。私の住む近くの十  
町川にはエビは居ないので川沿村(今  
の和水町菰田、竈門、江栗あたり)  
まで出かけて行かなければなりま  
せん。近所の「悪ガキ」と2・3人竿  
をかついで歯の擦り減った下駄をカ  
タカタ踏み鳴らしながら良く行つた  
のは江栗でした。崖の藪を押し分  
けながら川面に降りて岩の上に陣  
取り短い竿から糸を垂らすのです。  
1人で20匹も釣れば喜んで持ち帰り、  
醤油で炊いて真っ赤に色付いた工  
ビを食べたものです。山鹿から下  
流では何処へ行っても簡単に釣れ  
ていたので食用としても大変重宝

がられていましたが、いつの頃か  
らか全く釣れなくなってしまうま  
した。やはり水質の汚染と河川改  
修工事のせいだろうと思えますが  
大変寂しいことです。最近は何工  
ビを放流しているとのことですが  
エビ釣りの話もときどき聞くよう  
になりました。

私たちは菊池川にいるエビを一  
般にカワエビ、ダグマなどと言い  
ますが、正式には節足動物門、エ  
ビ目、テナガエビ科に属します。  
しかしテナガエビ科に何種類かあ  
るようで、菊池川のはミナミテナ  
ガエビではないだろうかと思われ  
ます。子どもの頃釣り上げたエビ  
の詳しい観察記録がないので分か  
りません。他所から持ってきた個  
体を放流したら在来種と外来種と  
の区別が分かり難くなります。

ミナミテナガエビは体長10セン  
チ程で日本では千葉県以南、沖縄  
から台湾まで分布し、九州でテナ  
ガエビといえはこの種が多いとい  
うことです。灰褐色で半透明、黒  
い縞模様があります。テナガエビ  
の特徴は鋏脚が長く発達している  
ことで、雄は体長の1.5倍以上もあ  
ります。長く伸びた鋏脚は第2脚  
が大きくなったもので、大きくなつ  
た鋏脚の間にもう1対の小さな鋏脚  
があります。水底を移動するとき  
はこの2対の鋏脚を前に出して後  
ろの3体の脚で歩行します。淡水



域の藻の中や岩陰に潜んだりして  
いて、どちらかといえば夜行性で  
すが、昼間も曇ったり日差しが弱  
い時は活動します。縄張り意識が  
強く、肉食が多いので飼育する場  
合は小魚とは共存できません。餌  
が少なくなると共食いもして最後  
は1匹になってしまいます。5〜  
9月に産卵し小さい卵を1000〜  
2000個程度腹にかかえ孵化するま  
で保護します。孵化した幼生は海へ  
下り、稚エビは又川を遡上します。  
エビ類は一般に非常に美味です。  
伊勢エビを始めクルマエビ、タイ  
シヨウエビ、アマエビ、ロブスタ  
ーなど大変美味しいものばかりです。  
かんじんのカワエビは塩湯がきで  
も美味しいし、砂糖醤油で甘辛く  
炊いても懐かしい香りがして郷愁  
をそそる味です。

# 歴史調査の楽しみ方

# 日平城跡 17

ひら びら じょう あこ

熊本県立装飾古墳館館長  
大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

## 日

平城跡の麓には、二箇所集落が存在します。北東下に蜻浦地区、北西下に日平地区です。これらは、日平城の城下町に該当するもので、麓集落と呼ばれます。I郭(岩場の山頂：標高342.2m)とは、蜻浦から284.7m、日平(瀬戸)から297.8mの高低差があります。蜻浦林道を車で上がっても6分近くかかります。かなりの高山に築かれた山城なのです。

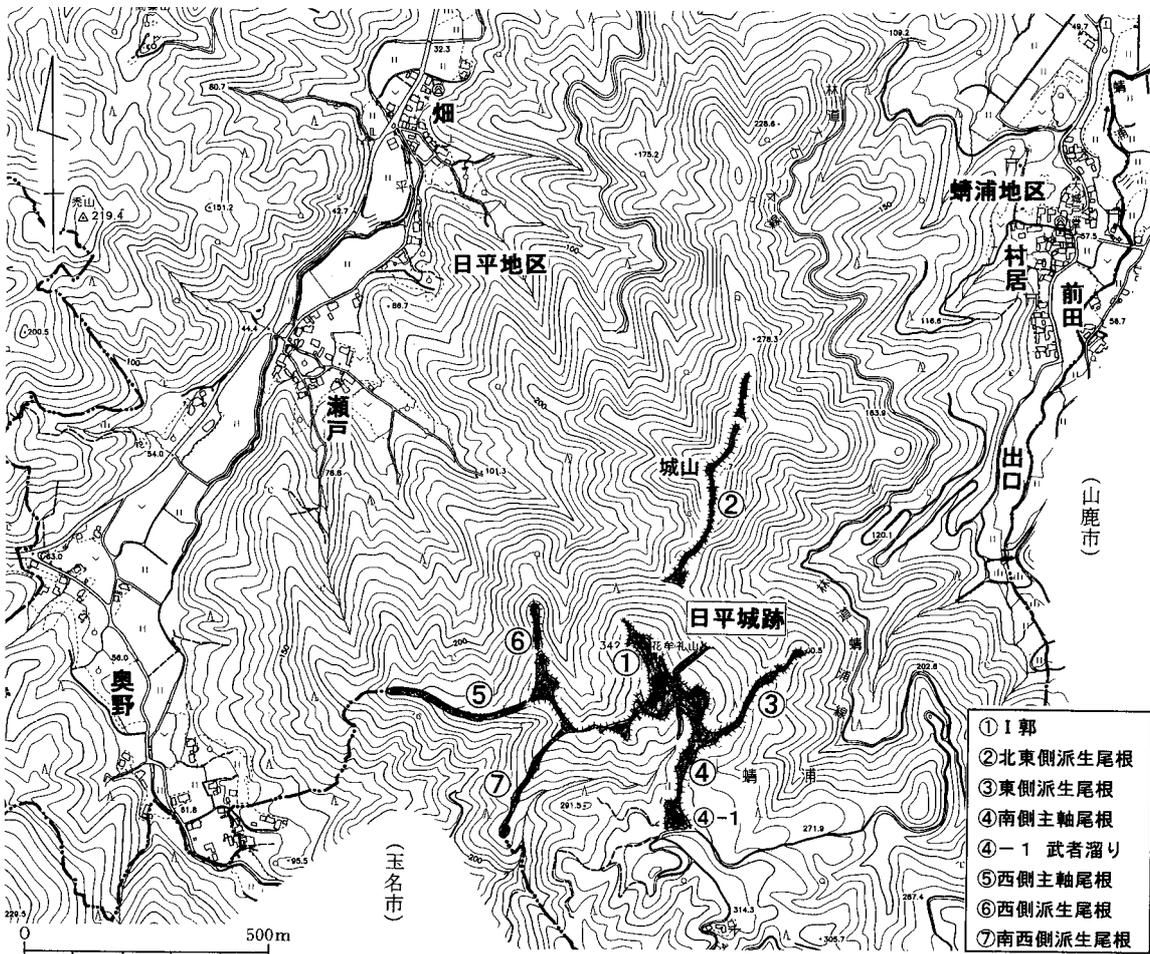
今月号には、これらの事を再認識するために、全体が一目で分かる地形図を掲載しました。

麓集落の領民は、城の維持管理に大きくかかわっていました。城内の草刈り、土砂崩れの復旧作業などに、大きな役割を果たしました。山北(玉東町)を拠点とした小森田氏はともかく、城代の居館や城詰め武士の住まいもあつたと思われまます。これらの解明にも繋がる、地名、伝承、石造物等の調査も今後、必要です。

〔縄張り〕地形図の中の①～⑦は、城の縄張りをブロック毎に区割りしたものです。①・④・⑤は、山の主軸尾根です。大方の山城では、この箇所に、郭(平場)、堀切、小段など

が集中します。

ところが、日平城の縄張りには、大きな特徴があります。②・③・⑥・⑦の派生尾根です。傾斜する「やせ馬地形」ですが、先端部は、全て、小山になっています。さらに、程度の差はありますが、地形の変化点には、堀切もあります。城山と呼ばれる②が典型的なものです。四箇所は、いずれも「物見の場」として利用されたと考えられます。②が北東方向、③が東方向、⑥が北西方向、⑦が南方向を監視できます。自然地形をそっくり、縄張りに取り入れたものでもちろん、人の手も加えられていますが、見事なまでの分散型の縄張りです。まるで、海の生物のヒトデの様相をなしていた事が分かります。調査は、現在進行中の⑥・⑦を終えてから、⑤の西側主軸尾根に取りかかります。日平城跡の調査も、正念場を迎えました。それにしても、調査中の圧迫感、どこからくるのでしょうか。現場が人里離れた高山で、静寂の場だからでしょうか。それとも、戦いの場になった歴史の重みからでしょうか。



日平城跡 麓集落 (北西側：日平地区 北東側：蜻浦地区)